

大会報告

第6回日本医薬品情報学会総会・学術大会開催報告

信州大学医学部附属病院薬剤部
第6回日本医薬品情報学会総会・学術大会事務局

松永 民秀

第6回日本医薬品情報学会総会・学術大会は平成15年6月21日(土)、22日(日)の2日間、長野県の松本市中央公民館Mウイングで約230名の参加者を迎えて開催しました。

穂高岳や常念岳といった高い山々に囲まれた標高600メートルを超える城下町松本は、全国的にも降雨量が少ない所ではありますが、開催直前に梅雨入りしてからは、台風の影響もありさすがにぐずついた日が続いておりました。しかし、幸いにも台風が梅雨前線を押し上げてくれたお陰で、学会前日から天候が回復し、21日には快晴となりました。

今回は、研究会から学会になって初めての学術大会でもあり、専門集団ばかりでなく一般の方々にも広く医薬品関連領域の現況をご理解いただけたらという本大会実行委員長の考えから、初日の午前中を利用して市民公開講座を開催することにし、山崎会長に講演をお願いしました。講演は「くすりとは何かを考えよう - サリドマイドの教訓をいかして -」との演題で、サリドマイドやソリブジンなど日本で発生した薬害事件を教訓として、医薬品を適正に使用するためには医薬品情報がいかに重要であるかについて、創薬の歴史や医薬品開発の手続きなどを含め、一般の方々にも解りやすくお話をさせていただきました。また、市民公開講座では講演の他に、松本薬剤師会のご協力を得て「おくすり相談コーナー」を設置しました。講演の前後に10名ほどの利用があり、日頃使用している薬についての質問や悩みなどを薬剤師に熱心に相談されている姿が見られました。さらに、信州大学医学部附属病院治験管理センターから、「治験」を正しく理解してい

ただために、とのことでおくすり相談コーナーの横でポスターの展示がなされました。

21日午後以降の学術大会は、特別講演、教育講演、一般講演(口頭発表、ポスター発表)の3つの部門から構成しました。信州大学医学部附属病院/子どものこころ診療部の天野直二教授による特別講演は、「子どもの心を読む科学 - 診断・治療・ケア -」と題してお話がありました。信州大学では子どものこころ診療部が開設されて1年になりますが、先生がその治療経験を通して心の病をもつ子どもの診断と治療、ケアをいかにしているかなど、我々が知らなければならぬ小児神経疾患についての患者情報等のお話を伺うことが出来ました。

次に、一般講演に移り、15題の口頭発表がありました。発表後、活発な質疑応答が行われ、演題によっては質問をご遠慮願わなければならないほどでした。

一日目の講演終了後、参加者相互の親睦と情報交換の場を持つために、国宝松本城のすぐ近くにあり、地元では老舗の松本ホテル花月にて懇親会を行いました。参加者は約70名にもなり、大変にぎやかな会となりました。会終了後は松本の街に繰り出された方もあったようです。山崎会長は郷土料理を出す店で「蜂の子」、「イナゴ」、「ざざむし」の佃煮に挑戦されましたが、さて長野の味は如何だったのでしょうか?

二日目は、9時30分より総会が行われました。その中で、次期学術大会はNTT東日本関東病院薬剤部長/東京大学医学部客員研究員の折井孝男先生を中心として東京で開催さ



おくすり相談コーナー



懇親会で山崎会長の挨拶



教育講演

れることが決定しました。総会后、折井孝男先生より「医薬品情報の臨床でのさらなる応用に向けて」と題して教育講演がありました。先生の講演は、本学会が今後大きく飛躍するために、学問としての医薬品情報学が将来どうあるべきかという非常に示唆に富んだ内容であり、教育講演ならではの重みを感じました。続く二つ目の教育講演として、福井医科大学医学部附属病院薬剤部長の政田幹夫教授は「医薬品情報の臨床でのさらなる応用に向けて」との題目で、緊急安全性情報（ドクターレター）など具体的な話を例に出され、専門職向けに実務の中でのより具体的な内容について熱のこもった講演をされました。

午後1時30分からは一般講演ポスター発表（21演題）の討論を行っていただきました。ポスターは20日の午後からずっと掲示されていたので、講演の合間などに下見をされている先生も多く見かけました。そして、討論時には質問したり、アドバイスしたりと皆大変熱心に討論されていました。

本大会の一般講演は、ポスター発表を含めると病院、大学、保険薬局、医薬品卸業、医療機器メーカー、日本医薬情報センター、厚生労働省（国立医薬品食品衛生研究所）からの申込がありました。病院からの発表の中には、薬剤師の他

に医師、看護師、事務など様々な職種の方々が共同研究者になっている演題もあり、医薬品情報が医療現場で幅広く関わっていることを反映しているものと思われます。このように、教育から臨床現場まで内容が多岐にわたり大変興味深い発表が数多くありました。しかし、政田先生のお話でもありましたように、「MR Based Medicine」と呼ばれるほど現在の医療現場においては製薬企業の医薬品情報担当者の影響は大きいにも関わらず、製薬企業からの発表がなかったことが残念でした。申込の段階で気を付けていれば分かったはずなので、大会事務局からより積極的に発表依頼をすべきであったかと、反省しております。

今回、新しい試みとして、講演要旨集を学会誌に掲載し、非会員の先生には講演要旨の別刷りを大会当日に配布することといたしました。このようなやり方が今後続くかは色々と議論もあろうかと思いますが、学会に参加されなかった会員の先生にも、どのような講演がなされているか知っていただく（それこそ情報提供の）良い方法ではないかと思えます。また、演題申込から要旨原稿の送付まで出来る限りメールで行いました。メールの場合その日の内に問題が解決することが多いため、その便利さを今更ながら実感した次第です。さらに、スライドを学会開催前に送付することに協力していただき、最も心配だった発表時のトラブルがなく何よりでした。

本会の準備から開催まで何かと不手際もありましたが、皆様のご協力とご支援によりお陰様で無事終了することが出来ました。最後になりましたが、本会を開催するにあたりご援助頂いた多くの企業・団体並びに本学会事務局の皆様にご厚く御礼申し上げます。



ポスター会場